

「ラテンアメリカの独立へ」  
- 第二部：独立運動の推進思想 -

"Hacia la independencia de América Latina"

*Segunda parte:*

*Acontecimientos y transformaciones que condujeron a  
la emancipación política*

Bernardo P. ASTIGUETA, S. J.

ベルナルド・アスティゲタ

En la primera parte de este trabajo, anteriormente publicada, hemos tratado sobre el siglo XVIII en Europa, prestando particular atención a España, con el objetivo de señalar el transfondo ideológico del movimiento independentista de las colonias españolas en América. Esta segunda parte enfoca el proceso de emancipación política que se prolonga hasta mediados del siglo XIX, tomando como eje central las corrientes de pensamiento que operaron en su desarrollo. El objetivo de esta segunda parte es, sobre todo, señalar qué fue lo que condujo en último término a la emancipación y qué significó la independencia para América Latina.

Al analizar los cambios que se operaron en la sociedad hispanoamericana de fines del siglo XVIII, hemos tomado tres aspectos ligados entre sí: la transformación del entorno creada por el acontecer político y económico, el cambio de perspectivas que ello produjo y la transformación social que a su vez generó. Dicho de otra forma, por qué razón y cómo cambió la conciencia que los protagonistas de la historia de Hispanoamérica, a partir de la segunda mitad del siglo XVIII, tenían de sí, de su territorio, y de su relación con España, y cómo a su vez modificaron esa realidad a partir de esta nueva conciencia.

Al igual que en la primera parte de este trabajo, la versión japonesa fue realizada en base a las notas tomadas en clase de la asignatura "Historia del Pensamiento Español e Hispanoamericano" que comunmente se dicta en

español. La redacción fue hecha por dos alumnas de nuestra universidad, que tomaron parte en ese curso, Sachiyo Murase y Yuko Ueda, y a esta última debo sobre todo la corrección final, en la cual colaboraron también los estudiantes de esa asignatura en el segundo semestre del curso 2000-2001. A todos ellos debemos nuestro más grato reconocimiento por su labor y espíritu de colaboración.

## はじめに

前稿では、ラテンアメリカの独立を促した思想的背景として、ヨーロッパ全体及びスペインの18世紀を取り上げた。本稿はその内容を受け、同時期から19世紀の独立へと向かっていったラテンアメリカを、歴史的な一連の流れと、その背後に流れる思想を軸に見ていく。そして、ラテンアメリカを独立へと導いたものは何であったのか、またラテンアメリカが達成した独立とはいかなるものであったのかを見ていきたい。

考察するにあたってまず、人間社会進化の過程は、常に以下の3段階をふまえていることに留意したい。つまり、環境（外面）の変化が、心理（内面）の変化を生み出し、それが、さらなる現実の変化を生むのである。身体の変化によって、意識や価値観に変化がもたらされ、外に変革を求めていく思春期の人間に喩えることもできよう。具体的にここでは、とりわけ18世紀後半以降、植民地を取り巻く状況に大きな変化が生じ、その影響によって、ラテンアメリカの人々（特に現地生まれの白人；以下クリオーリョと呼ぶ）のそれまでの価値観が揺らぎ、やがて独立運動へと発展していったというこの過程にあたり、本稿ではこれにそってラテンアメリカの独立を考えていく。

## ・ 植民地の進展

### 1. スペイン本国との関係

かつて“太陽の沈まぬ国”と呼ばれたスペインも、18世紀には覇権国家としての地位を既に失いつつあった。それは前稿でも述べたように、カルロス2世亡き後のスペイン継承戦争、国土縮小を強いられた二つの条約（ユトレヒト条約、ラシュタット和約）を経て、社会・経済がともに急速

に衰退したからであり、さらにはイギリスの拡張主義の下でスペインの海上覇権が失われていったからであった。だからこそ、その一方で人口が増加し経済的な成長を見せていた植民地が、スペインにとって非常に重要な存在であったことは想像に難くない。それでは、そのような状況にあったスペインと植民地との関係はどのようなものだったのだろうか。

この頃までの植民地では、スペインのカディスを中心港とした独占貿易がなされていた。交易に使用する港及び貿易の相手国、取り引きの商品そのものまでが本国スペインによって制限されていたのである。イギリスやフランスといった国々との間でも交易は始まっていたものの、それは限られた範囲でのものであった。また生産においては、貿易のため、つまり本国発展のためのものが優先されていたので、商品の特化が進み、さらにそれらの商品は、まず指定された港へ運ばれ、そこからスペインへと輸送されたため、港から遠い産地では非効率的な生産物の流通に不満の声も多かった。植民地との交易は、直接その発展を目的としたものではなく、貿易の利は全てスペインに帰するようになっていたのである。

それでは、本国スペインと植民地上記のような関係は、どのような植民地社会を形成していったのか。植民地では、法律上はみな平等であったが、ごく少数の本国生まれの白人（以下ペニンスラーレスと呼ぶ）が政治的権力を握る階級社会が形成された。階級は大きく三つに分けることができる。まず、社会の最も上層に位置していたのはペニンスラーレスであった。彼らは政治の要職を独占して寡頭政治を行い、入植者により建設されたスペイン型の内陸都市に住むことが多かった。その下に置かれていたのが、クリオーリョである。経済的には裕福な暮らしをしている者も多かったが、政治の舞台に上がることはできなかった。このように、同じスペイン人でありながら、植民地において生まれたがために政治的・社会的に待遇が不平等であったため、彼らの中には現状への不満が生まれていった。そしてそれは後、独立への原動力になっていく。クリオーリョのさらに下に位置していたのが混血、先住民、黒人といった人々であった。また、一部下層のクリオーリョ達もそこに含まれることがある。彼らは労働者階級であり、最も虐げられていた。そのため、植民地社会をしばしば不安定に

する要素が多く存在し、抵抗や反乱もここから多く発生した。上層の二階級、すなわちペニンスラーレスとクリオーリヨが占めていた階級が、植民地の政治・経済を動かしていたのだが、数的には植民地人口全体のわずかな部分にすぎず、植民地社会の大部分を構成していたのは下層階級の人々であった。

このように、ごく少数のスペイン人達は、ピラミッド型の階級社会の中で絶大な権力を掌握していた。先にも述べたように、どんなに優れた人材であつたり実質的な経済力を持ち合わせていたとしても、本国生まれのスペイン人に替わって政治的舞台での主役を演じることはないクリオーリヨ達は、その状況に甘んじることができず、ペニンスラーレスとの対立の色を深めていった。このスペイン本国と植民地の差別化が、独立運動の原点の一つとなるのであり、両者の関係を見ていく上で留意すべき点であるといえよう。

## 2. 経済発展

本稿の冒頭で述べたが、スペインが衰退する一方で、植民地は飛躍的な経済発展を遂げていた。ここでは、その経済発展について詳しく見ていくことにしたい。

植民地の経済成長の背景としては、まず人口増加が挙げられる。1750年から1800年の間、植民地の人口は8%も増加し、これは同時期のヨーロッパにおける増加率の約二倍にあたるものであった。最も人口の多かったヌエバ・エスパーニャ副王領では、その人口が七百万人にも上った。この人口増加が豊富な労働力の供給源となり、鉱業・農業など一次産品の増産を可能にした。特に1778年から1796年の間においては、顕著な増産を見ることができる。例えばメキシコ（当時のヌエバ・エスパーニャ副王領）の銀の生産は、採掘法や精錬法の改良も手伝って、1702年の五百万ペソから1804年には二千七百万ペソにまで増加し、現在のボリビアにあったポトシ銀山でも約二倍の生産高となっている。現在のベネズエラでは、コーヒー、カカオ、砂糖、タバコ、綿花といった農産物の開発が進み、キューバでも砂糖生産が盛んになった。農産物は、次第に交易

において重要性を高めていくことになる。

1778年から1796年にかけて特に成長が著しかったと述べたが、その発展は、当時のスペイン国王カルロス3世が行った一連の改革によるところが大きい。スペインはそれまで、重商主義政策の下、植民地と独占貿易を行ってきたが、国力の衰退や財政難により、この時期にはその維持がかなり難しくなっていた。独占貿易の維持には、各地に船団を配備したり、海上覇権を確実なものにするために軍隊を保持したりと、多大なコストがかかったのである。また、実質的に既に独占貿易体制がある程度破られていたことも挙げられる。法的にはそれを維持しているつもりでも、実際にはイギリスやフランスなどとの密貿易は法の目をくぐって行われており、海賊船などの存在はもはや否定できなくなっていた。こうして独占貿易維持が不可能となり、自由貿易への転換を余儀なくされたカルロス3世は、その改革の中で、完全な自由貿易の実現には及ばなかったものの、1765年以降独占貿易を廃止していった。具体的には、スペインで13、植民地で21の港が開放され、ここにカディス港を中心とした独占貿易は終わることになった。

しかし、確かに植民地経済は活性化したが、あくまでも制限付き自由貿易であったため、それは同時に、植民地と、本国を含む列強の間での経済的な従属関係が強化されることを意味した。つまり、植民地側は一次産品に特化した生産、輸出をし、列強側はそれを安く買い取り、自国の工業製品を大量に植民地に売りつけるという国際分業体制に変わりはなく、むしろ不平等な経済相互依存が強まっていったのである。この経済構造は、今日においても根本的には変化しておらず、現ラテンアメリカ諸国が抱える大きな悩みの一つとなっている。

では、植民地の経済発展は、その社会にどう影響したのだろうか。植民地が遂げた経済的成長は、経済活動の中心的役割を担ってきたクリオーリョ達に意識の変化をもたらした。港が開放され栄えるに従い、商業活動に従事するクリオーリョ達の中で、ここは副王領である、すなわちスペイン帝国の一部であるという意識よりも、本国に従属を強いられている植民地

である、という意識の方が大きくなってきたのである。植民地の富は、ここアメリカの副王領のためではなく、スペイン本国のためだけのものとなっているということに、彼らは次第に気付くようになった。また、植民地社会での待遇には、本国生まれか否かで明らかに差があり、同じスペイン人であっても本国生まれで異なった価値観や文化を持つペンスラーレスと、植民地で生まれ育った自分達クリオーリョとは異なるのだ、という考えも生む。つまり、クリオーリョ達は経済発展の中で実質的な力をつけながら、本国生まれのペンスラーレスらと同じスペイン人であるということを受け入れなくなっていった。そういった意識が、必然的に独立運動の動機へとつながっていくのである。

### 3. ブルボン朝による改革

冒頭で、スペインの18世紀は、イギリスを始めとする西欧諸国が仕掛けた継承戦争で幕を開け、イギリスとの七年戦争で幕を閉じたと述べたが、そのような衰退の世紀はスペインに国力再興を図るための近代化を迫った。そうして行われたブルボン朝による一連の改革を最も推進したのが、先に触れたカルロス3世である。一体その改革は、どのような特徴を持ったものだったのだろうか。また、それによってスペイン及び植民地に生じた変化は、どのようなものだったのだろうか。

まず、この王は、この時代のヨーロッパに多く存在した啓蒙専制君主の一人であったことに注意したい。政治に啓蒙思想家達の意見を取り入れ、権威を民衆と分け合うという形を取ったのが啓蒙専制主義であると前稿で述べたが、それはあくまでも上からの改革であり、“全ては民衆のために、しかし民衆の参加なしに”という言葉が示すように、根本的に君主制を否定するものではなかった。そのため彼の一連の改革も、啓蒙思想の実践と君主制維持のための中央集権の強化という、両方の要素を盛り込んだものになる。また中央集権化という目的は、本国のみならず植民地においても適用されたため、新大陸の対列強防衛も重要な政策の一つとなった。全体的に見ると、カルロス3世の改革は、スペインを植民地も含めた一つの国家として国民及び列強に再認識させるといふ、統一国家としてのアイデンティティー確立を目指した、あるいは誇示したものだといえよう。

そのような考え方に基づいた彼の植民地における改革の主眼は、行政改革と経済の自由化であった。まず、行政改革において何が行われたのかを見ていくことにする。

行政改革では、主に二つの改革を挙げることができる。一つは、二つの副王領の新設である。それまでスペイン植民地では、ヌエバ・エスパーニャ（設置1535年、首都メキシコシティ）とペルー（同1544年、リマ）の二つの副王領しかなく、特にペルー副王領は広範な地域を統括しなくてはならなかった。こうした行政区分は、急激に進展していた北部、南部の実態にそぐわず、そのような辺境地域は海外列強の進出の標的となっていた。そこで新たに、1717年、ボゴタを首都とするヌエバ・グラナダ副王領と、1776年、ブエノスアイレスを首都とするリオ・デ・ラ・プラタ副王領の二つが創設された。

しかし、行政区分の最上位にある副王領は、それでもまだ広大な地域を含んでいたため、当時の未発達な交通・通信手段では円滑な統治は困難を極めた。このため、より狭い行政区画である総督領（カラカス、チリ）と長官領も設置された。

もう一つは、インテンデンシア制の導入である。この制度は、本国スペインから監察官（インテンデンテ）を直接派遣し、副王に従属させずに行政、財政、司法、軍事の四つの権限を与えるというものであった。主な目的は、税収の効率化により王室の財政を豊かにすることであり、ある程度の成果を収めた。

次に経済の自由化についてだが、それは前にも述べたようにカルロス3世が、カディス港を中心とした独占貿易に終止符を打ったことに始まる。本国では、カディス以外の港でも植民地との交易が可能になり、また植民地においても、新しく港が開かれたことにより流通が効率的になった。結果、スペイン・植民地間の交易が増加し、経済を活性化させた。

以上ここまで、改革の内容を概観してきた。ではそれらを受け、実際に植民地社会ではどのような動きが見られたのだろうか。

まず、啓蒙思想の流入が挙げられる。この時期ヨーロッパでは既に、17世紀以来の近代思想の上に啓蒙思想が開花していた。そして、その思想が植民地で実践されるに至った二つの象徴的な出来事が、1776年のアメリカ合衆国の独立と、その影響を多分に受けた1789年のフランス革命である。植民地からヨーロッパへの留学生は、そうした思潮に学び、帰国後、独立運動の指導者となる者もいた。

また、行政機構の再編に伴い、スペイン人の政治的支配力が強化され、クリオーリョのさらなる反感を招くこととなった。新たに導入されたインテンデンスシア制などの行政システムにおいて、要職はそれまでと変わらずペンスラーレスらによって独占されていた。一方で、自由化を受け経済は活性化し、クリオーリョの経済力はそれまでにも増して向上した。中には、ペンスラーレスを凌ぐほどの財を築く者もいた程である。そうして、さらに強い政治の実権を握るようになったペンスラーレスと、経済力を後ろ盾に、自分達の声の反映をより強く求めだしたクリオーリョとの間の軋轢は拡大していった。

これらの動きは、後に独立へと向かう大きなうねりとなっていく。

## ・政治的自立

### 1. 激動する社会

上述したように、植民地の18世紀は、カルロス3世に象徴される「改革の時代」であったが、それは同時に「反乱の時代」でもあった。ブルボン改革は、新大陸における社会、経済構造の再編を意図したものだったが、結果的には、先住民を始めとする被植民者をスペイン統治機関及び諸制度に縛り付けることになり、増税や隷属的労働の強化への反発から各地で反乱が起こった。以下その例を挙げてみよう。

- ・キューバ(1717~23年)
- ・パラグアイ(1721~35、コムネーロスの反乱)
- ・コチャパンバ(1730、コムネーロスの反乱)
- ・ベネズエラ(1749~52)
- ・エクアドル(1764 - キト、1765 - リオバンバ、



1777 - オタウアロ、1780 - アムサト)

- ・ヌエバ・グラナダ(1780)
- ・ペルー(1780 - トゥパック・アマルの反乱)

これらの反乱において注目すべきなのは、それが社会底辺の人々の手によるものであり、独立運動に直接つながるものではなかったということである。先住民や黒人奴隷など、低社会層の人々による反抗は、重税や労役といった現状への不満が吹き出したものであったが、寄せ集めの武器を手にしただけの彼らのほとんどは、次々とスペイン軍に鎮圧される。

1780年に、ペルー副王領でスペイン人の圧政と搾取に対して立ち上がったトゥパック・アマルの反乱は、ラテンアメリカ全土に知れ渡り、例外的にある程度の影響を持った。しかし、結局は1781年に彼が処刑され、83年に終結している。数多くの反乱は、どれも王室を震撼させるほどのものではなかったのである。

ラテンアメリカ独立運動の主役となっていくのは、これら社会の底辺で苦しむ人々ではなく、経済力に見合った政治的立場にないことに不満を募らせていたクリオーリョ達であった。アメリカ合衆国の独立という宗主国からの解放の具体例を得て、彼らは植民地独立を求める姿勢を強めていくのであるが、しかし一方で、必ずしもフランス革命のように急進的な社会改革は望まず、自分達の既得権益を保持したままでの独立を考えていた。クリオーリョ達にとってフランス革命は、市民による下からの社会改革が可能であるという意味においては希望であったが、その内実においては警告的な意味を持ち得るものであった。旧体制のヒエラルキーを完全に覆し、全国民が平等な社会を構築するということは、クリオーリョ達がそれまで築き上げてきた特権を否定し、自分達の地位を危うくする可能性があったからである。フランス革命が提示した自由の実現は、クリオーリョ達にとって簡単に受け入れられるものではなかった。

## 2. ハイチの独立

ラテンアメリカで初めて本国支配に対する火の手が上がったのは、フランス領サンドマング(現在のハイチ)である。

当時サンドマングは、ラテンアメリカの中でも有数の砂糖とコーヒー生産地であり、アフリカから連行した大量の黒人奴隷を用いた、プランテーション型の大規模な農業が営まれていた。その社会を支配していたのは、植民者であるフランス人と、植民地生まれの白人クリオーリョである。18世紀後半までには、アフランチス（主に白人と黒人の混血であり、ある程度の権利を有していた自由有色人種）も、全プランテーションの約三分の一を所有するまでになっていたが、彼らは肌の色により差別され、結局あらゆる権限を掌握していたのはフランス人であった。この支配層の下、農園で過酷な労働に従事させられ社会的にも虐げられていたのは、全人口の大部分を占める黒人奴隷である。そのような中、1789年、本国フランスでは革命が勃発し、その報は植民地サンドマングにももたらされた。第三身分による革命の実現は、アフランチスや奴隷に、彼らのように下層階級に属する者でも社会変革を遂行できるとの自信を与え、白人支配に対して募っていた不満はついに爆発する。

1791年、サンドマング北部のプランテーションで起こった奴隷の反乱は、大規模な内戦へと発展する。翌92年、白人と有色人種の権利平等を認める宣言がフランス革命政府により採択されると、サンドマングの白人はこれに反発し、白人経営者ら支配階級はイギリス領ジャマイカの白人を、黒人奴隷ら被支配階級はスペイン領サント・ドミンゴ（エスパニョーラ島東部）の黒人をそれぞれ後ろ盾につけ、戦禍はやがて全土を覆うまでになった。フランスの鎮圧部隊やイギリス軍も介入し事態が複雑化する中、1793年、フランス総監は奴隷解放令を出した。黒人側の指導者であったトゥサン・ルヴェルチュールはそれに応じてフランス革命政府側につき、植民地の白人支配の時代に終止符を打った。そして、以後約5年間かけてイギリス軍の駆逐を達成し、後にナポレオンにより送り込まれた再征服軍をも退けたサンドマングは、1804年、ハイチ共和国として独立を宣言する。これは、ラテンアメリカ植民地で初の独立であると同時に、世界初の黒人共和国の誕生を意味した。

ハイチ独立に際し、他のラテンアメリカ植民地における反響はどのようなものだったのだろうか。

ハイチの独立は、ラテンアメリカ全土に大きな衝撃を与え、様々な議論を呼ぶ。共和国の成立は、他の植民地の低社会層に属する人々に、自分達の手でも支配体制を覆し国を統治することができるのだという希望を示し、他方で、彼らの上に立ち、様々な特権を享受していた支配者達の危機感を煽った。後に独立運動の中心を担うクリオーリョ達は、白人政権を全面的に否定したハイチの独立を手放しで歓迎することはできず、むしろそうした社会底辺の人々による革命を危険視する姿勢を強めたのである。

### 3. 独立への道

ラテンアメリカでは、改革と反乱の18世紀を経て、ハイチ独立に始まった19世紀に大部分の地域が独立国として産声をあげた。ここでは、その背景、契機、及びその容易ならざる独立への道のりを見ていくことにする。

本国スペインでは、一連のブルボン改革をもってしてももはや国力の衰退を押し留めることはできず、植民地政策は様々な反乱を引き起こし、イギリスやアメリカ合衆国など列強の進出を前に貿易統制もままならない状態であった。さらに、1805年のトラファルガーの海戦でイギリス軍に大敗したことは、海上覇権がスペインの手から完全に失われたことを表している。このように、本国が衰退の一途を辿る一方で、植民地社会では、政治の実権を握り続けるペニンスラーレスと、経済力はあっても彼らと同等に扱ってもらえないクリオーリョとの間で溝が深まるばかりであった。つまり、本国の弱体化と、植民地社会が階級間の軋轢という不安要素を抱えていたことが、独立運動への気運を高めていたのである。

植民地の具体的な独立運動への契機は、スペイン本国に内在した。つまり、ナポレオンの侵略に対するスペイン民衆の反乱である。

大陸封鎖でイギリスの孤立化を図るナポレオンは、そのイギリスと同盟関係にあるポルトガルを制圧するため、1807年イベリア半島に侵入し、ポルトガルのみならずスペインをも占領する。ポルトガルでは、イギリスの支援を受けて王室がブラジル植民地へと脱出し、スペインでは、フェルナンド7世に代わって、ナポレオンの実兄ジョゼフ・ボナパルテがスベ

ン国王として即位した。このナポレオンが擁立した新国王に対し、スペイン民衆は対抗する姿勢を示し、国内各地で政務委員会フンタが相次いで組織される。1808年には、イギリスの援助でセビリヤに、それら反ナポレオン闘争の組織を統率する中央政務委員会フンタ・スプレーマが設立された。これは、退位させられたフェルナンド7世の名の下に反ナポレオンとして集結された、スペイン及び植民地の最高統治機関であり、翌年にはシスネーロスをラプラタ副王領の新副王に任命するなど、実際植民地統治機関としての機能を果たしていた。しかし、1810年のセビリヤ陥落に伴って解散し、替わってコンセホ・デ・レヘンシアが、再びイギリスの支援を受けてスペイン南端に位置するカディスに設立された。1812年、この地で当時としては急進的な自由主義憲法が採択される。基本は立憲君主制であったが、植民地の言論と集会の自由が認められたり、植民地の代表を半島の議会に送ることができるなど、様々な改革が試みられた。この画期的な憲法により承認された事実上の自治権及び平等な地位は、後の独立運動の強力な推進力となる。しかし、こうして本国と植民地との間の法的平等が確立されたものの、スペインがラテンアメリカを植民地として見下げる姿勢に変わりはない。

このようにめまぐるしく変化する本国の情勢は、植民地にも伝えられたが、その反応は様々であった。スペインの王座がナポレオンの手に渡った今、植民地は一体どこに帰属すべきなのか。ジョゼフ・ボナバルテに忠誠を誓うのか、それとも本国の委員会に従ってこれまで通りフェルナンド7世に誓うのか。この問いに、ラテンアメリカ社会の人々は、それぞれの立場を考慮しつつ異なった分析を試みた。そして結局、後者の立場をとることとし、スペインをモデルとしてそれまでの市町村議会カビルドをもとに、フェルナンド7世を支持する政務委員会を各地に設立していく。やがてこれらの委員会は、本国の混乱と弱体化に伴い、貿易の自由化や減税、独自の軍隊編成などそれまで望まれてきた改革を行うことになる。こうしてラテンアメリカ植民地は、表向きは本国のフェルナンド7世に忠誠を誓う形をとりながら、徐々に事実上の自治を獲得していったのである。この、名目上はフェルナンド7世に属する各地の委員会は、1812年のカディス憲法が謳う自由主義の影響も手伝って、時が経つにつれてさらに自治権を

拡大させていき、これ以上スペインに支配されている必要はないと、ついにスペインからの独立そのものを考える者さえ出てくる。例えば、メキシコ中央部、カラカス、サンタフェ・デ・ボゴタ、キト、さらにブエノスアイレス、サンティアゴなどの各地域、都市で、独立を求める初期的な動きが見られた。しかし、これが即独立運動につながったわけではなく、独立という経験が今までない以上、自分達の権益を保持しながら独立することは可能か、また独立後はどのような政治形態で誰が治めるのかといった自由獲得と引き換えの責任問題を前に、彼らは直進的に独立へ向かうことはできなかった。

#### 4. 王政復古：スペインによる植民地再征服と独立運動

では、その後実際にラテンアメリカ各地域はどのように独立を達成していったのか。カディス憲法により確立された自由主義体制は、スペインの絶対王政への復帰により短期間で終焉を迎えることとなった。しかしこの王政復古こそが、植民地独立への最終的な引き金となったのである。

1814年、ナポレオン戦争が終結する。彼によってかき乱された全ヨーロッパの戦後処理のためウィーン会議が開かれ、フランス革命前の正統王朝と旧制度の復活を目指す正統主義が唱えられた。これによってスペインでも王政復古がなされ、フェルナンド7世が王位に返り咲く。彼は復位するや否やまずカディス憲法を廃止し、絶対王政復活を宣言した。植民地の独立運動制圧のため、4万5千もの大軍を送り込んでみいる。しかし、いったん自由主義の風を味わった植民地側をもはや旧制度に再び完全に組み込むことはできず、1817年、本国は譲歩して協定を結ぼうとするも、植民地の政務委員会はこれを拒んだ。1820年にはスペインのリエゴ將軍が蜂起し、自由主義者であった彼は、カディス憲法の復活と新規の植民地制圧軍派遣の取り止めを王に認めさせた。そうしたスペイン側の動きを突いて、ラテンアメリカ諸地域は少しずつ、だが確実に独立への歩を進めていったのである。以下、その過程を追っていく。

まず、商業の盛んなラプラタ地域では、独占特権を守り通そうとする本国商人と現地のクリオーリョ商人とが長い間対立していた。そんな中、本

国スペインの政治的空白期間が生じ、独立への気運が生じる。ブエノスアイレス市民は政務委員会を設立し、これがフェルナンド7世に直屬する自らの統治機関だとして本国からの副王を追放した。この政務委員会が母体となってスペインに反旗を翻していき、1816年、リオ・デ・ラ・プラタ連合州として独立を宣言する。これには現在のボリビアやパラグアイ、ウルグアイも含まれており、首都ブエノスアイレスとこれらの近隣県との間では、特に商業上の利益をめぐる抗争が絶えなかった。しかし、ボリビアや1811年に独立しているパラグアイ制圧は失敗に終わり、スペイン領（アルゼンチン）とポルトガル領（ブラジル）にその領土を争われたウルグアイは、イギリスが介入して両国間の緩衝地帯として独立した。

次にペルーだが、ラテンアメリカの真の独立達成のためには、地理的、政治的中心地であるこのペルー攻略が欠かせなかった。ラプラタ地域出身でアルゼンチン独立運動の中から頭角を現した軍人サン・マルティンは、誰もが思い及ばなかったアンデス越えを敢行しチリに侵入、1818年にはその独立が決定的なものとなった。

続いて海岸部からペルーに上陸した彼は、1821年に首都リマに入って独立を宣言する。そして、港の開放、ペニンスラーレスの追放と財産没収、先住民への課税や強制労役の廃止など、様々な自由主義政策が行われた。しかし、これでペルー全土が彼の独立宣言を認めたわけではなく、アルト・ペルー（現ボリビア）などの地域では副王軍が烈しく抵抗していた。サン・マルティンは、ともに英雄と崇められているシモン・ボリーバルとペルーの今後について話し合うことにする。

ベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビアの独立においては、シモン・ボリーバルが指導的役割を果たした。

ベネズエラで彼は当初苦戦を強いられるが、1819年までには国内の独立派勢力を結集させた。次に彼は、ヌエバ・グラナダ領（現コロンビア）の独立に乗り出して勝利を収め、1821年、今度はカラボボの戦いでスペイン軍を撃破してカラカスを占領、ベネズエラの完全な独立を達成する。すると彼は、西進してピチンチャの戦いでも勝利し、キトの明け渡しに成功、エクアドルは解放された。そこで彼は、かねてからの夢を実現するべ

く、まずベネズエラ、コロンビアの二カ国で大コロンビア共和国を建国、翌年にはエクアドルも組み込んだ。このコロンビアの憲法制定議会は、アンゴストゥーラで新憲法を採択しているが、それは奴隷の解放こそ謳われていないものの、三権分立や共和主義的な自由の枠組みを有していた。大統領にはポリール自身が就任する。しかし、互いの利益をめぐる何かと不協和音が生じ、1830年に大コロンビアは解体、もとの三国に戻った。1903年には、コロンビアからパナマが分離独立する。

さかのぼって1822年、ポリールは、グアヤキルでアルト・ペルー再征服の援軍要請に来たサン・マルティンと会見する。当時の資料が何も残されていないので詳しいことはわからないが、それぞれ大コロンビア共和国問題、ペルー問題を抱える二人は、会談の始めから話が食い違っていたらしい。またなぜかこの会談の後、サン・マルティンは戦線を離れヨーロッパに出国し、全てはポリールの手に委ねられることとなる。24年、フニンとアヤクチョの戦いでの勝利によって、アルト・ペルーはついに独立共和国となった。後に国名は、ポリールに因んでポリビアと名付けられている。その共和国憲法はこれといった成果を生み出さないが、統治形態は終身かつ後継者指名権を有する大統領が存在する大統領制で、三院制の複雑な構造を持っていた。またここでも、ポリールによってペルーとアルト・ペルーを一つにする大ペルー国の構想が練られるが、現地のクリオーリョ達の賛同は得られなかった。

メキシコは、本国スペインに近いその土地柄上、また経済的に一番豊かだったため、監視の目が特に厳しく、独立の過程も他の地域とは多少異なってメキシコ独自の性質を帯びた。ここでももともとペニンスラーレスとクリオーリョの対立は続いていたが、1810年、保守的な新副王が即位し、クリオーリョらによって結成・活発化していた本国の緊急事態への対応策を論ずる秘密結社の摘発に、さらに力をいれた。

この知らせがドロレスという村に伝えられた時、この村の司祭ミゲル・イダルゴが農民に武装蜂起を呼びかけた。世にいう「ドロレスの叫び」であり、これをメキシコ独立運動の発端とすることもある。この動きはもともと、スペインからの独立を要求したものではなかったが、農民や労働者など参加者が増えるにつれて、社会革命的な様相を呈していった。

やがて、目標を白人に定めて、これを滅ぼそうとする危険な性格を持っていることに気付いたクリオーリョ達は、この運動にはっきりと背を向けて副王側についた。

イダルゴ軍は戦闘体験のない者達の寄せ集めにすぎず、彼は後に処刑されるが、司祭ホセ・マリア・モレーロスが副王軍への抵抗を続ける。彼は、自由主義的な「十ヶ条の原則」を採択していたため、クリオーリョらがますます反発の色を強めたことはいうまでもない。

1820年、本国スペインでは軍部が蜂起し、フェルナンド7世がカディス憲法の復活を認めた。これに乗じて副王軍の指揮官であったイトゥルビーデは、自由主義体制の波及を恐れるクリオーリョを納得させる形で、メキシコの独立宣言案イグアラ計画を発表し、また反乱軍をも、スペインからの完全な独立という甘言で味方につける。こうして権力の座につこうとする彼に対して、スペインからは新たな総司令官が送り込まれて来たが、しかしこの人物は寝返ってイグアラ計画を承認したので、結局イトゥルビーデはそのまま首都に入り、1822年、アグスティーン一世を名乗って帝政をひいた。しかし、この穏健なやり方に不満を持つ者達によって、彼は即位後わずか十ヶ月で失脚し、翌年銃殺されている。24年には、グアダルルーペ・ビクトリアがメキシコ初代大統領として就任した。

中央アメリカについては、以下の通りである。まず1821年、グアテマラ総督領からグアテマラが独立し、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグアの総督領からも同名の三カ国が独立した。コスタリカ総督領からはコスタリカ一國が独立している。こうして誕生した中米五カ国は、1823年に中米連合として連邦国家となるが、1838年には解体し、現在ある形の中米諸国として独立した。

こうしてスペイン領アメリカの各地では、1840年頃までにキューバ、プエルトリコ、パナマを除いた全地域が独立した。ポルトガル領ブラジルは、はじめブラジル帝国として平和的に独立し、やがて共和制へと移行している。



## 5．独立の光と影 ～達成と挫折～

以上、スペイン植民地独立運動の背景、及びその過程について述べてきた。では、独立によって達成されたものは具体的にどういったものだったのだろうか。逆に、達成されなかったものは何だろうか。ここでは、独立の光の部分と影の部分を政治、社会、経済の三つの側面から見ていきたい。

はじめに、政治面から考えてみることにする。まず、スペインによる支配から脱却、統治権を獲得し独立国家としての道を歩み始めたことが、独立運動の最も大きな成果であったといえる。15世紀以来スペイン帝国の一部として本国本意の開拓、搾取により翻弄されてきた時代が、ここに終わりを告げたのである。

しかし、植民地がスペインから独立するに際して、地域という枠組みを超えたラテンアメリカ全体としての団結は生まれなかった。独立過程あるいはその後において、地域相互間の連携は薄く国家の細分化が進むのである。例えば、ラプラタ地域では内紛が続き、ペルー副王領は、チリ、ペルー、ボリビアの三国に分裂して独立、中央アメリカ地域はメキシコから分離し、さらにその後現在ある複数の共和国へと別れていった。また、ヌエバ・グラナダ副王領から誕生した大コロンビアも、ベネズエラ、エクアドル、コロンビアの三国に分裂する。独立諸国が一致団結して、安全保障などのための協力体制を構築することを夢見たボリーバルは、1826年パナマ会議を召集するが、この試みも失敗に終わる。

このように地域を越えた統合が成功しなかった理由には、ラテンアメリカという土地があまりに広大であり、かつ自然の境界線の障害力が大きかったことなど、地理的な制約要因に加え、各地域がそれぞれに異なった独立運動を展開していったことが挙げられる。地域ごとに、その社会構成や歩んできた歴史、植民地政策上での重要度が異なり、それぞれ独自の政治体制を望んでいたのである。

次に社会面からはどうだろうか。端的にいえば、ラテンアメリカにおいて大半を占める被支配者階級に属していた人々にとって、独立は本質的な社会状況の変化をもたらさなかった。確かに、先住民に特別に課せられて

いた人頭税は廃止され、奴隷も解放されるなど、法律上では様々な改善が見られた。しかし、もともと土地を持たない彼らは身分的に解放されても、それは「ない土地」で生産せよというようなもので、生計を立てるために結局は、新たな土地の所有者の下で賃金労働に従事せざるをえなかった。社会底辺の人々の生活状況に、なんら根本的な変化はもたらされなかったのである。つまり、独立は彼らにとって、雇い主がそれまでのペニンスラーレスから新たに権力を握ったクリオーリヨになったという、主人の交替でしかなかったのだ。

一方、独立をめぐる長く続いた戦乱は、人口構成の一時的な不均衡と新たな階級の誕生をもたらした。全人口に占める女子の割合は、戦争に多くの男子が駆り出されたため著しく増加し、いびつな人口構成図を形成した。また、戦場で活躍した多くの軍人らから成る新階級、つまり軍人階級が誕生し、やがてそれは世襲性を帯びる。こうしてラテンアメリカ社会に定着したこの階級は、現代においても大きな影響力を持っている。

もう一つ社会面から独立のもたらしたものとして、ヨーロッパからの移民が挙げられる。閉鎖的な植民地から解放された独立国へと生まれ変わったことにより、ラテンアメリカには大量のヨーロッパ系の移民が流入するようになる。彼らは、豊富な農産物や鉱物資源を持つ“約束された地”ラテンアメリカへ豊かさを求めてやって来た。これらの移民は、ラテンアメリカ社会形成の様々な局面において影響を及ぼすなど、ラテンアメリカを理解する上で欠かすことのできない重要な要素となっている。

最後に、経済面から独立の意義を考えてみたい。

まずいえることは、植民地の地域経済は、戦争の結果完全に崩壊していたということである。生産システムそのものも破綻し、かつ戦争資金調達のため経済は極度に疲弊していた。その経済を立て直すための税金の増加は、ただ国民の不満を招くだけであった。

そしておそらく最も大切なことは、植民地の独立が必ずしも経済的な自立には結びつかなかったということである。確かに、それまでスペインとの間に構築されていた不平等な経済的相互依存関係は、独立により終焉を迎え、ラテンアメリカ経済は、植民地時代の制約を払拭し、世界貿易に向けて開放されて発展していくと期待された。しかし現実には、これからこ

うして経済の立て直しを図ろうというラテンアメリカは、産業革命によって原料の供給と市場開拓を必要としていた、イギリスの格好の餌食となった。ラテンアメリカには、イギリスによって大量で安価な製品が持ち込まれ、現地の既存の手工業が衰退に追い込まれる。しかも、戦争資金を調達したイギリスへの借金返済のために、関税収入に頼ろうと輸入を促進したことがさらなる悪循環へと拍車をかける。当初発展につながると考えられていたイギリスという有力工業国との提携は、この新たな従属関係の誕生にすぎなかった。つまり、ラテンアメリカにとってその独立、経済的解放は、従属相手がスペインからイギリスへと移行しただけであり、イギリスの経済的植民地と化すことを意味したのである。

## ・ 思想史における独立

前稿で、新しい思想と社会の変化は互いに結びついていることを述べ、18世紀に文化的・思想的自由を達成したヨーロッパ社会を人間の思春期に喩えた。つまり、自らの身体的な変化から精神上の変化が生じ、それが状況の変化をもたらすと説明したわけである。

前章までにおいて、18世紀ラテンアメリカの有り様、独立の背景という身体的変化と、最終的に達成された独立という状況の変化を見てきたわけだが、本章では、精神的な変化、つまり思想という側面からラテンアメリカの18世紀を据えてみたい。より具体的にいえば、17世紀頃からラテンアメリカに流入してきた近代思想、特に啓蒙思想について、それがどのように到来、普及し、独立運動及びその後の社会形成にどのような影響を与えていったのかを見ていく。

### 1. 啓蒙思想の到来

ヨーロッパ、特にイギリスやフランスを中心に発展した啓蒙思想などの近代思想は、どのようにしてラテンアメリカ世界にもたらされたのか。主に二つの経路を挙げることができる。植民地におけるヨーロッパからの修道会による教育と、ヨーロッパへの留学生によるものである。

まず教育だが、それまで植民地では教会が教育を一手に担っていた。具体的には修道会、中でもイエズス会の活動が活発であった。17世紀に入

り、ヨーロッパで合理主義や自然科学が芽生え盛んになると、それらは植民地の教育カリキュラムの中にも取り入れられるようになって学ばれていき、その近代思想は、後に政治や経済分野など多岐に渡って影響力を發揮する。イエズス会は、それまでの神を中心とした考えを真っ向から否定したわけではないが、時として王政に批判的な革新思想もその教育内容に含まれていたため、スペインから危険視されることもあった。1767年そのイエズス会はついに、スペインによってラテンアメリカ全土から追放される。

もう一つの経路は、ラテンアメリカからヨーロッパへ渡った上流階級、とりわけクリオーリョらが、留学生として啓蒙思想家達の生きた考えを学んできたことである。このヨーロッパでの体験を通して啓蒙思想に触れた者のうち、帰国後実際に独立するにあたって中心的役割を果たした者は多い。その際彼らはこの啓蒙思想を抛り所とし、また独立後、崩壊した政治や経済を再建するのにもこの思想を取り入れた。

## 2. 独立の主役者達

独立運動の中心となった人物については、もう少し詳しく述べる必要があるだろう。

主に運動を推し進めたのはクリオーリョ達だが、スペインの血をひいていた彼らは、社会の大半を占めていた被支配者階級の人々とは違って、ラテンアメリカを外から見る目を持っていたようであり、また高水準の教育を受ける機会に恵まれていた。独立運動の先頭に立って軍の指揮を執った軍人であるだけでなく、同時に政治家であり、思想家であり、また時には文筆家でもあるなど、いわば知識人であった。イギリス、アメリカ合衆国で知識人として名を馳せ、ベネズエラ独立に力を尽くしたフランシスコ・ミランダ、ラテンアメリカ独立の父と呼ばれ、憲法起草に携わり著作も多く残しているシモン・ボリーバル、メキシコ独立の指導者ミゲル・イダルゴ神父など、多くの知識人が独立運動の主役者として名を連ねている。彼らは皆、ヨーロッパの思想を意欲的に吸収し、それをラテンアメリカの現状に合わせて解釈、適用していった。

ただこの時期のラテンアメリカは、地域ごとに独自の独立運動を展開し

ていたため、啓蒙思想の享受のされ方や実現の仕方はそれぞれ異なっていて、一様に定義することは難しい。しかし、啓蒙思想の根幹である、人間の理性の力を強く信奉している点はともに共通している。政治、経済、法律、宗教、教育など全ての分野において、理性至上主義として合理性が追求され、伝統や旧来の権威など理性にそぐわないものは排除されていく傾向が強かった。つまり、ラテンアメリカの独立を思想の面から考える時、それは理性を信ずる人間による、合理性の構築であったということもできるのではないだろうか。

### 3. 啓蒙思想の普及

修道会による教育や、独立運動の主導者らを入り口にラテンアメリカに流入してきた啓蒙思想は、その後、どのように広がっていったのか。ここでは、普及の媒体を挙げながら、ヨーロッパからやって来た思想が、ラテンアメリカ社会においていかに浸透していったかをみていきたい。

まず媒体として挙げることができるのは、大学教育である。独立運動の主導者達の関心事は、政治だけでなく思想的な事柄にも及んでいたため、教育が重要視された。独立期である1820年代には、大学や図書館など教育機関が増設され、そこでは様々な思想や科学が学ばれた。扱われた題材としては、ニュートンの万有引力説や、スピノザの汎神論などがあり、それらは単に科学的な分野にとどまらず、人々が世界を見る時の視点にまで影響を及ぼすものであった。また図書館は当時そのほとんどが私立のものであったため、全ての人がアクセスできるような公立のものが望まれるようになる。こうして、大学や図書館といったアカデミックな教育機関は、啓蒙思想普及のための中心的な存在となろうとしたが、独立をめぐる戦乱が制約となりその施設設備などが十分に整わず、なかなか学術的活動が進展しなかったことは否めない。チリでは、1842年に初等教育実施の試みが見られた。

大学が上記のような制約を抱える一方で、重要になっていったのが新聞である。思想や政策などを普及させるのに最も効果的かつ迅速な手段であり、大衆にとっての主要な情報源であった新聞は、政治的な関心事が表現

される場として影響力を増し、啓蒙化の一手段として発展していった。当時の新聞の紙名には、“デスベルタドール（覚醒者）”や“エル・アメリカーノ・リブレ（自由のアメリカ人）”など、その目的がはっきりと表わされているものもある。また、例えばメキシコでもともと15紙あった新聞が40にまで増加したように、この時期には各地で新聞の発刊数が増加した。このように新聞が力を発揮するようになるにつれ、ラテンアメリカの啓蒙思想家ともいえる独立の主導者達は、思想の一つ一つを深く掘り下げていくことよりも、思想がより広く大衆に浸透することを重要視するようになっていった。

啓蒙思想の普及に貢献したものとしては、文学も挙げることができる。中には、次第に新聞よりも大きな影響力を持つようになるものもあり、その形態は詩、小説、随筆など様々であった。詩では、ホセ・マリーア・エレディアの作品『Niágara』に、大河の流れを独立の戦乱になぞらえるなどの秀逸な描写が見ることができる。また、ラテンアメリカ初的小説『Periquillo Sarmiento』を書いたフェルナンデス・リサルディ（177? ~ 1827）は、新聞の書き手から小説家へとなった人物で、作品には啓蒙思想的な要素も含まれている。彼の社会を風刺する姿勢に見られるように、この時代のラテンアメリカ小説には政治・社会的色彩を帯びたものが非常に多かった。現代ラテンアメリカ文学においても、そのような思想の普及媒体としての性格は残っている。大衆に、より理解が容易な形の文体を提供した随筆は、スペインにおけるそれと同じように流行した。司祭でもあったカミノ・エンリケは、随筆を書き残した人物の一人であり、彼の作品には啓蒙思想の教科書ともいえそうな記述を見ることができる。自然法により、全ての国民は自由と社会の繁栄を基礎にした権利を保有すると述べていることや、自由のための最も重要な要素の一つとして出版の自由を挙げていることなど、啓蒙思想の核心が集約されている。特に出版の自由は、知識の源泉を自由に求め拡大するためのものとして重要であり、知識の欠乏・無知を社会の足かせとして捉え、これの打開に向けて邁進しようとする啓蒙思想の方向性を表わしているといえよう。アンドレス・ベリヨもこの時代のラテンアメリカで活躍した文筆家の一人で、『Silvas americanas』、『Filosofía del entendimiento』、『La gramática de la lengua

castellana』などの作品を残している。

最後に、演劇を挙げたい。上記の新聞や文学などの活字媒体は、広範囲で普及したものの、一般民衆は教育レベルがまだまだ低かったため、その恩恵を十分に享受することができなかった。そこで、文盲も多い一般の人々に媒体として作用したのが、演劇であった。題目には、政治問題や戦争ものや詩の朗読などが並んだ。

#### 4．政治的・社会的風潮

啓蒙思想は、上述のような入り口と道のりを経て次第にラテンアメリカ社会に浸透していった。では、その思想は独立にどのような関わりを持っていたのだろうか。社会に一体何をもたらしたのだろうか。ヨーロッパから到来したこの近代思想が、ラテンアメリカ社会において果たした役割を考察してみたい。

前章では、様々な媒体を通して啓蒙思想が普及したと述べたが、実は、ヨーロッパの思想がそのまま純粋な形でラテンアメリカ社会に広まったわけではなかった。当時のラテンアメリカは、例えば、旧来のものの見方に固執する教会と近代的思想を積極的に取り入れる大学というように、二つのタイプの教育機関が混在する状況にあり、人々の間には、伝統的な思想と舶来の新しい思想とをうまく織り交ぜようとする、折衷主義的な姿勢が生れた。そのため、ヨーロッパからの啓蒙思想はそのような社会に適応することが求められ、ある程度原形とは異なった形で普及していくのである。

なぜそのような適応が必要だったのか。それは、当時ラテンアメリカ社会では、まだ教会による教育が主流で、スコラ哲学が根強く社会に浸透していた上、当然のことながら、啓蒙思想を生んだイギリスやフランスといったヨーロッパ諸国の社会風土とラテンアメリカのそれは、同じものではありえなかったからである。また、啓蒙思想摂取の動機となったのは、植民地に替わる新しい政治体制を実現したいという願いであり、つまり啓蒙思想は、独立運動を精神的に支えるために外から借りてきたものだった。ラテンアメリカを土台に築き上げられたものではなかったため、何らかの

形でラテンアメリカ化しなければ社会に浸透することができなかった、ともいえる。現代においても、どのような理論や思想であれ、その地で生み出されたものでなければ、そのままの形で別の社会に適應し成功を収めることはできないということを、私達はしばしば観察することができる。

さらに政治的な面から見ると、独立後のラテンアメリカは、一種の無政府状態ともいえるほど非常に不安定な社会情勢を抱えていた。各地で考案された政治理論は多種多様であり、君主制か共和制か、連邦主義か州県主義かで議論は紛糾した。貿易など多方面においての自由の確立や、代議制・連邦制をとることはある程度主流となったが、地方ではカウディーリョと呼ばれる権力者が群雄割拠し、それらを統合しなおかつ代議制の国家を実現することは、至難の業であった。それぞれの地域はそれぞれの地域での独立を望み、啓蒙思想の「摂取」の仕方や解釈の有り様は、実に様々であったのである。

とはいえ、このように適宜咀嚼されながらも、徐々に浸透していった啓蒙思想が果たした独立運動の精神的支柱としての働きは、看過できるものではない。なぜなら独立により獲得された国民主権は、啓蒙思想こそが裏打ちするものともいえるからである。絶対的な君主に服従する国民から、為政者を自らの意志で選ぶ国民へ、つまり市民国家の実現へとラテンアメリカを導いた国民主権の概念は、啓蒙思想の一環として流入してきたものであり、その思想が掲げた自由は、独立を目指した人々の間に流れる大きな思想的潮流であった。新生独立国家の政治理論は、様々でまとまりがなく、どれも明瞭かつ強力な国家形成の牽引力とはならなかったが、植民地という旧体制から勝ち取った自由と国民主権は、明確な成果として認めることができるのである。

他方で、啓蒙思想を精神的な拠り所として独立したラテンアメリカ諸国は、自分達は一体何者なのかという、根本的なアイデンティティーの問題にぶつかることになった。独立後に議論された様々な政治体制は、一貫性がなく矛盾に満ちたものであったが、その矛盾は、独立を望み中心的指導者として活躍してきたクリオーリョの中に、当初から潜在的に存在してい



たといえるのではないか。スペイン人でありながら、ペニンスラーレスと同じスペイン人であるということは容易に受け入れられず、しかし、フランス革命にみられるような低社会層の人々の解放は二の次で、自分達の既得権益保持に努めるなど、現地の人々とは一線を画している。つまり、スペイン系の血を受け継ぎながらもスペインに帰属意識を見出すことができず、かといって自分達のいるラテンアメリカ内にそれを見出すこともできなかったのである。「私達は一体何者なのか」、その問いかけは今もなおラテンアメリカに投げかけられている。

## おわりに

前稿で、18世紀のヨーロッパは、人間に喩えると子供から大人への過渡期にあたる思春期であると述べた。外界の変化によって内面に変化がもたらされ、それによってさらなる変革が外に求められていく 具体的にいえば、ヨーロッパ世界を取り巻く環境のめざましい変化に導かれて、啓蒙思想が大きく開花し、その潮流に乗って自由や独立を追い求めていく

ヨーロッパの18世紀はこの一連の動きを体験した時期だったわけだが、その影響を大きく受けたのが、19世紀のラテンアメリカ世界であった。この時期にラテンアメリカはいわば思春期を迎え、その一連の動きをほぼ追随していくのである。

本国スペインがそれまでの権威を失って弱体化していく一方、植民地ラテンアメリカは人口の増加、経済の発展によって力をつけていく。そのように日々変化していく状況の中、ラテンアメリカの人々、とりわけ自分達の経済力に見合っただけの政治的地位の与えられていないクリオーリョ達は、支配され続けている現状に不条理を感じ、と同時に自分達はどこに帰属すべき者なのかといった自己認識をするようになる。彼らの価値観が揺らぎ始めたのだ。そのイデオロギー的な拠り所となったのが啓蒙思想であり、そこに描かれるのは、信仰による神の世界ではなく理性による人間の世界であった。こうして合理性が追求され、やがて彼らは神や王といったそれまでの絶対的権威からの解放、そして政治的権力を求めはじめるのだが、これらの動きの最終的な段階として独立が叫ばれたのである。しかし

この変革を思想的に支えたヨーロッパ発祥の啓蒙思想は、ラテンアメリカに画一的に採り入れられたのではなく、地理的要因やその他の風土も手伝って、ラテンアメリカなりに、さらにその中の各地なりに適宜解釈・摂取されていった。それゆえ独立の過程も実に様々なものとなる。また私達は今日のラテンアメリカにおいても、そこから生まれる多様性を多岐に渡って見ることができる。

こうしたラテンアメリカの歴史・思想史の中にあって、私達はその根底に一つの流れを見出すことができるのではないだろうか。

19世紀のラテンアメリカはその独立までの道を通じて、つまり政治・経済面、文化やそれを裏打ちする思想面におけるヨーロッパ依存から脱却していく自立過程の中で、ヨーロッパではない、しかし単なるアメリカではない、“ラテンアメリカ”を探し求めた。さらに、いわゆる独立を達成した後も現在に至るまで、軍事独裁政権などによる政治的不安定さと、先進国などによる経済的しがらみ、そしてともすれば軽視されがちな独自の文化の中で、「我々は一体何者なのか」という問いかけを続けている。ラテンアメリカの独立は、この自分自身への問いかけに始まり、さらなる問いかけで終わっているにすぎない。それはラテンアメリカ自身という自己の模索の道、あるいはアイデンティティー確立への道の第一歩ということができるだろう。

## 参考文献

- Lucena Samoral, M. , Lynch y otros, *Historia de Iberoamérica*, vol. III, Cátedra, Madrid, 1988.
- Martínez Díaz, N., *La Independencia Hispanoamericana*, Ed. Historia 16, Madrid, 1989.
- Ferrandís Torres, M., *Historia de la Cultura Universal*, tomo II. Estades, Madrid, 1956.
- Im Hof, U., *La Historia de la Ilustración*. Ed. Crítica, Barcelona, 1983.
- Enriquez Ureña, P. *Historia de la cultura en la América Hispánica*, Fondo de Cultura Económica, México, 1986.
- Monteverde, F., *Bolívar*, Ediciones de la Secretaría de Educación Pública, México, 1943.
- Davis, H.E., *Latin American Thought*, Lousiana State Univesity Press, Lousiana, 1972.